

2016年4月9日

第108回山口西田読書会（2016年4月9日）

第107回（同年4月2日）のprotocols

参加者：1 佐野、2 山口、3 岡田、4 谷、5 杉山、6 橋本、7 桑原、8 梅津\*、9 岡部（\*は初参加）

## I プロトコルの確認

論理式を主にして、A4用紙1枚にまとめたプロトコルのスタイルが議論になり、賛否両論あったが文章を主とするスタイルで統一することになった。そもそもプロトコルとは何であるかに関し「文章によって前回の議論を髣髴とさせるもの」であることが確認された。また、発言は自分の意見をまとめ拳手をしてから発言することが求められた。

プロトコルの内容面に指摘はなかったが、その日のノートを確認すると、第106回の焦点は《意識現象と自然現象の理解に関して、第3編2章の4-5段落で「意識が物体を作る」と意識をもとに説明されていたものが、同3章の5-6段落では超然とした同一物の両側面であるというように説明の仕方が変わっている》ことにあったとあり、それを式から読み取ることには困難を感じた。

### 【哲学的問い】

・哲学は役に立つべきものであるか。

応用面を考えていると思われる諸学、応用哲学の存在などに言及しながら、哲学の有用性に関する意見が交換された。訓詁学、文献学、哲学史学なども話題になった。

〔役立たないとする意見〕知りたいということである（役立つことは副産物）／役立つことを目的とすると狭いものになる／自分を知り、世界を知ることである

〔役立つとする意見〕生活ではなく精神に役立つ／形のないものをどのように表現しているか、に関心がある／応用することで、かえって広まることもある（研究が進む）

・西田哲学を使うことはどうか？

『善の研究』は人格の実現、真の自己を知るために「使っている」／西田は使うことを目的に書いたのではない／第3編に「真の自己を知る」ことの必要を書いている

## II テキスト（『善の研究』3編3章6-7段落目=最新の岩波文庫で151ページ）

原因のない偶然を自由とする考えに西田が対置している内面的自由に関してテキスト（3-3-6）に沿って確認した。参照した箇所は次のとおりである。

4-3-7 ここに「真の自由とは自己の内面的性質より働くといういわゆる必然的自由の意味でなければならぬ」との記述があることを確認した。

3-9-4 「我々の意識は思惟、想像においても意志においても知覚、感情、衝動においても、皆その根柢には内面的統一なる者が働いている」にも西田の考えがよく現れていることを確認した。

このように3編3章8段落の直前までを読了した。さらに7段落にある「理想的要素」に関しては1編4章の「知的直観」にも述べられていることが紹介された。

1-4-2 ここに「普通の知覚であっても（中略）決して単純ではない。必ず構成的である、理想的要素を含んでいる」との記述がある。

また3-3-7の「意識には必ず一般的性質の者がある」のような「一般的なるもの」に関して1編2章の8段落目に記述があることが紹介された。

1-2-8 我々は普通に思惟に由りて一般的なる者を知り、経験に由りて個体的なる者を知ると思うて居る。しかし個体を離れて一般的なる者があるのではない、真に一般的なる者は個体的実現の背後における潜勢力であるとの西田の理解を確認した。

## III 哲学的問い

理想が意識の根柢にあり、現実が理想が己自身を実現する一過程に過ぎない（3-3-7）としたら、現実としての自己（個性）は根柢にはないと考えてよいか。このとき理想＝純粹経験か。

（筆記：岡部）